

・登場人物

【川辺家】

川辺月子（小泉ツキコ）・川辺市子の本当の妹。  
小泉月子とトレードされた。1990年生まれ。  
川辺市子・無戸籍。月子の姉。川辺月子の戸籍で  
生きてきた。1987年生まれ。

川辺なつみ：市子と月子の母。2008年に失踪。

【無戸籍支援の会・証】

井出陽子：無戸籍支援の会「アカシ」リーダー。

元弁護士。葛城の友人。

葛城正枝：「アカシ」副リーダー。子供が300日  
問題の元無戸籍。井出の協力で戸籍を取得。

重松雪：無戸籍。親が不明で就籍手続き中。冬に  
拾われた。

松山有紗：元無戸籍。300日問題。現在は派遣  
社員として働いている。

熊田百子：元無戸籍。現在行方不明。月子と一番  
仲良し。父親に育てられた。ミュージシャンを  
目指している。

# 川辺月子のために

作 戸田彬弘

【週刊タックル】

高木曜：週刊タックル・編集者。後藤の恋人。  
後藤裕也：刑事後藤の息子。ルポライター。市子  
事件を追っている。

【市子関係者】

北秀和：市子の高校時代の同級生。市子のストー  
カー。

【小泉家】

小泉ツキコ（川辺月子）・小泉の実の娘。1990  
年生まれ。福山型筋ジストロフィー。

小泉正雄：川辺月子の育ての親。小泉月子の実父。

2008年の川辺市子失踪事件で謎の死去。

舞台は、前作「川辺市子のために」と同様に、中央に4畳半の尺上げされたステージが一つ象徴的に存在している。そのステージを囲むように、椅子が数十個並べられている。

この舞台は基本的に2018年8月の空間で行われるが、ステージの上、また舞台上全体が、人々の証言や想像世界に移行するとき、時に過去と現代に分断される。

壁に、映像が投射されている。

映像には、2008年当時を思わせる真夏の東大阪の団地の風景が無音で流れ続けている。時に文字。時に風景。繰り返し繰り返し。

投射される文字には「川辺市子のために」の証言(台詞)がランダムに映し出される。これは観客に読ませることを狙いにしておらず、潜在意識に「無戸籍」「2008年」「失踪」「殺人」「難病」「筋ジストロフィー」「真夏」「太陽」「東大阪」「団地」「踏切」などキーワードを意識させる為のものだ。

突然、踏切の音が劇場に鳴り響く。映像には「踏切」が静かに映し出されたまま、変化しない。

映像に、1人の男の影が入った瞬間、けたたましいクラクションの音とともに、暗転。

## 0 2008年の謎 2008年8月27日

クラクションの音がカットアウトされると共に、照明。

ステージの上には、川辺市子、小泉ツキコ、川辺なつみが現れる。

それぞれ違う方向を見て、立っている。やがて、緊迫した沈黙のあと、語り始める。

なつみ「あの日、2008年8月27日は、めっちゃ

や暑い日で、うちはいつも通り、2人の娘の為に、朝から仕事やって：朝のニュースで、気温が38度まで上がるって言うって、熱中症に気をつけて小まめに水を飲んでくださいって、何の不満も無さそうなABCのアナウンサーの男の人が喋ってるのを見て、市子に」

市子「今日は暑なるから、ツキコの汗、小まめに拭いたってって言われて、うちは、朝ご飯のそうめんを食べてた。朝から家は蒸し蒸ししてて、うちはまだクーラーが完備されてへんから、お母さんの汗が、そうめんつゆに落ちるのを見て、気色悪いなあって」

ツキコ「人を呼んでいる」んーあー…」

なつみ「ツキコは暑いのにニコニコしてたなあ」

市子「最近のお母さんは、うちに強く当たるようになって」

なつみ「市子」

市子「ツキコはうちが怒られるの見たら、」  
ツキコ「笑っている」

なつみ「限界やっただんです、もうほんまに、これ以上は限界やっただんです」

なつみの照明が消える。

市子「動かんくなった身体を頑張って動かそうとしてるようで、」

ツキコ「お母さん、お姉ちゃん、」

市子「ツキコはもう喋れへんはずなのに、」

ツキコ「お母さん」  
市子「(ツキコに)何で笑ってるん?」

ツキコ「お姉ちゃん」  
市子「あんたのせいで、うちもお母さんも…」

ツキコ「死んでもええよ」  
市子「え?」

ツキコ「うち、もうええよ」

市子「え？」

ツキコ「お姉ちゃんが殺してくれてええよ」

市子「何言うてんの？」

ツキコ「でも」

市子「何？」

ツキコ「最後にアイス食べてからでええ？」

市子「え？」

ツキコ「アイス、食べたい」

市子「うん」

ツキコ「食べさせて欲しいねん」

市子「うちは台所の冷凍庫からアイスを持って来た。

一箱16本入ってるドールのアイスキャンデー

があつて。ツキコはピンクが好きやから、桃味を

手に取って、うちも食べようって思っつて、うちは、

オレンジにした」

ツキコ「ありがとう」

市子「はは」

ツキコ「冷たい」

市子「ツキコはもう呼吸器つけてるから、食べる為

に、呼吸器外さんとして思っつて、うちは呼吸器を

外した…」

沈黙。

市子「あつついから、アイスがポタポタツキコの顔

に落ちた。ツキコはうちの目をじっと見つめて、

嫌や、死にたくないって顔をしたような気がして」

ツキコ「……」

市子「叫ぶことも、動くことも出来ひん、ツキコは、

そのまま、ひゅーひゅー言っつて、静かに死んで行

った」

ツキコ「……」

市子、アイスクリームの歌を口ずさむ。

時間が経過し、ヒグラシが鳴き始める。

なつみが帰宅してくる。

なつみ「市子。…どうしたん？電気もつけんと」

市子「お母さん」

なつみ「(ツキコの遺体を見つける)」

市子「お母さん」

なつみ「市子」

市子「なに？」

なつみ「市子」

市子「うち」

なつみ「うん」

市子「うちな」

なつみ「ありがとうな」

市子「え？」

なつみ「…水、飲み」

市子「え？」

なつみ「こっちきい」

市子「うん」

市子となつみが隣りの部屋に行くように、舞

台上から居なくなる。

舞台上には、ツキコ1人。

そこに、小泉がやってきて、

その瞬間、空間と時間に変化し、

小泉ツキコから川辺月子に変貌している。

1 小泉月子の存在 2005年10月

小泉「ただいま」

月子「…うん」

小泉「学校は？」

月子「……」

小泉「またさぼったんか？」

月子「別に」

小泉「別になんか？」

月子「…なに？」

小泉「楽しくないんか？」

月子「……」

小泉「友達は？」

月子「え？」

小泉「おらんのか？」

月子「おるよ」

小泉「…そうか」

月子「……」

小泉「(月子をジロジロ見て)」

月子「なに？」

小泉「似てきたな」

月子「え？」

小泉「いや、何も」

月子「…うち、行かなあかん？」

小泉「どこに？」

月子「…どこにって」

小泉「え？なんでや？」

月子「んー、だって…」

小泉「毎月楽しみにしてはるんやから」

月子「えー…」

小泉「な？」

月子「……」

小泉「…何が嫌やねん？」

月子「行けるわけないやん…」

小泉「なんでや？」

月子「……」

小泉「お母さんやろ？」

月子「……」

小泉「お姉ちゃんやろ？」

月子「……」

小泉「…説明したやろ？」

月子「え？あれが説明になの？そっちの都合でう

ちのこと、」

小泉「お父さん」

月子「……」

小泉「お父さんやろ」

月子「……ちがうやん」

小泉「(触れて) 月子」

月子「触らんとって！」

小泉「分かるやろ？」

月子「分からん」

小泉「何でわからんねや…お父さんもなつみさんも、

そうするしか無かったんやから」

月子「何、そうするって」

小泉「みんながちゃんと生きるためについて」

月子「みんなちやうやん」

小泉「…みんなや」

月子「市子ちゃんと、おばさんがやる？」

小泉「月子のお母さんやぞ」

月子「なんで」

月子「気色悪い」

小泉「……」

月子、部屋を飛び出す。

暫くして、なつみが現れる。

小泉「すみません」

なつみ「ええよ」

小泉「…あの子は元気ですか？」

なつみ「変わらず、ニコニコしてる」

小泉「そうですか」

なつみ「でも」

小泉「…でも？」

なつみ「もう自分で座るのキツイみたいやわ」

小泉「……仕方ないです」

なつみ「市子がよう面倒見てくれてる」

小泉「すみません」

なつみ「…月子に、話すの早かったんかな」

小泉「僕はそうは思いません」

なつみ「元々はうちのせいやから」

小泉「何言っんですか！なつみさんは悪くないです」

なつみ「…ありがとう。優しいなあ、正雄くんは」

小泉「…なつみさん」

2人、キスをする。

そのまま行為に移行しようとした時、

なつみ「当分、食事はやめとこうか」

小泉「え？」

なつみ「月子がちゃんと納得できるまで」

小泉「でも」

なつみ「そういう年頃やし、ちゃんと自分で整理で

きるまで。ね」

小泉「分かりました」

なつみ「それまで、うちらも会うのやめとこう」

小泉「そこまでせんでも…」

なつみ「月子を、お願いします」

小泉「…こちらこそ、ツキコをお願いします」

なつみ「ほんなら、また落ち着いたら」

小泉「はい」

小泉が出て行く。

音楽。

## 2 なつみの証言 2018年1月8日

ある事件のニュースが流れてくる。

### 映像 事故現場

男性記者（声）「千葉県館山市見物海岸から、一台の乗用車が発見されました。中からは、30歳前後と見られる男女の遺体が発見され、腐敗が進み、ほぼ白骨化状態だという事です。男性は、車の所有者ナンバーから北秀和さん27歳の可能性が高々とみて、捜査が進められています。発見者は地元に住む70代の男性で、早朝に犬の散歩をしていたところ、海に浮かぶ車が見えたとのことです」

なつみがニュースを見つめている。

後藤裕也が現れる。

なつみ「その子はうちの娘かもしれませんが。うちの大事な…。確認させて貰えませんか？」

後藤「川辺なつみさん、1967年大阪生まれ。離婚歴が一度ありますね？」

なつみ「はい」

後藤「お子さんは1人娘の川辺月子さん、1990年生まれで、2008年頃行方不明、2015年に生駒山の山中で白骨化した遺体が発見された。そうですよね？」

なつみ「……」

後藤「違うんですか？」

なつみ「……」

後藤「この館山で見つかったご遺体、あなたの娘と  
いうのは、この川辺月子さんだという事ですか？」

なつみ「あの、そうやなくて」

後藤「そうじゃなくて？」

なつみ「ややこしいんですけど、」

後藤「なつみさん、あなた一度、この福祉課尋ねられてますよね？」

なつみ「はい」

後藤「だけど、遺骨を受け取る事ができなかった、それはどうしてですか？」

なつみ「それは、娘が既に死んでるからで、」

後藤「死んでいるから？」

なつみ「月子は、もう死にました。でも、うちにはもう1人娘がいるんです」

後藤「…どういう意味ですか？」

なつみ「…戸籍には載ってへんのです。それだけです」

後藤「…無戸籍…ですか？」

なつみ「…そうです。名前は市子です」

後藤「…証拠はあるんですか？」

なつみ「証拠？」

後藤「そりや、それがないとダメでしょ？でも、まあ僕は警察でもないし、別にどっちでもいいんですけど」

なつみ「……」

後藤「だけど、記事は面白くないと駄目でしょ」

なつみ「……馬鹿にしてるんですか？」

後藤「なつみさんも、記事にして欲しいのは、何か訴えたいことがあるからでしょ？」

なつみ「……」

後藤「目的があるんだったら結果が全てですよ？沢山の人が注目されたいでしょ？そしたら、面白くないと」

なつみ「……」

後藤「一個一個聞かせて下さいよ。沢山聞きたいなあ。その市子って子のことも。なんで無戸籍で生きさせたのか。色々あるんでしょう？2008年の行方不明も。2015年白骨化して発見されたことも」

なつみ「……」

後藤「絶対色んなおもしろいことあるんでしょ？」

時間がゆがみはじめる。

気づくと、市子、月子、小泉が現れている。

なつみ「市子ー」

市子「お母さん」

なつみ「今日は市子の誕生日やから」

市子「え？」

なつみ「好きなもん何でも作ったげる」

市子「お母さん？」

なつみ「あのね、市子は今日から月子なんよ」

市子「え？」

小泉「月子」

月子「なに？」

なつみ「月子は今日で一旦さよならやな」

月子「え？」

なつみ「分かってな」

月子「えー？」

小泉「月子」

月子「なに？」

小泉「あのな、今日から僕が月子のお父さんや」

月子「えー？」

なつみ「月子」

月子「お母さん」

なつみ「月子」

市子「なに？」

なつみ「そう。市子は今日から月子なんよ」

市子「うち、こんとき、いつも忙しいお母さんが相

手してくれることが嬉しくて」

月子「嬉しくて」

なつみ「市子」

市子「え？」

月子「お母さん」

なつみ「月子」

月子「いやや」

なつみ「月子はええ子やなあ」

月子「いやや」

なつみ「すぐ会えるから」

市子「月子」

月子「いやや」

市子「お母さん困ってるやん」

月子「お姉ちゃん」

市子「お母さん困ってるやん」

月子「えー」

なつみ「月子はええ子やなあ」

市子「お母さん」

なつみ「市子もええ子やなあ」

小泉「なつみさん」

なつみ「正雄くん」

小泉「これでええんですよね？」

なつみ「今更」

月子「お母さん」

なつみ「月子は今日で一旦さよならやな」

市子・月子「え？」

なつみ「好きなもん何でも作ったげる」

市子・月子「お母さん？」

なつみ「あのね、今日から新しく始めるんよ」

小泉「そうや」

なつみ「あのね、今日から新しく始まるんよ」

市子「なんかよくわからんけど…」

月子「よくわからんけど、この時、もう1人、寝た

まんまの女の子がおって」

市子「おって…」

月子「その子のこと…」

センターに一筋の照明が入る。

なつみ「ツキコー」

月子「ツキコって呼ばれとって、月子はうちやのに」

市子「ツキコーって呼ばれとって、今日からうちが

月子やのに」

小泉「月子ー」

月子「なに？」

小泉「今日から始めような」  
月子「えー…」

なつみ「市子ー」  
市子「お母さん」  
なつみ「市子は今日から月子なんよ」

市子「うちは誰？」  
なつみ「月子や」  
月子「この子は誰？」  
小泉「ツキコや」

なつみ「今日から、新しく始めるんよ」

市子となつみが、月子と小泉が手を繋ぐ。  
ツキコの照明だけが印象に残りながら、  
暗転。

タイトル「川辺月子のために」

音楽が止んでいき、  
台風が近づいている強い風の音がする。

3 アカシの面々 2018年9月2日

ゆっくりと照明がつくと、  
インターホンが鳴る。  
反応がない。  
もう一度、インターホンが鳴る。  
やはり、反応がない。  
暫くして、高木曜が現れる。

高木「すみませーん」  
慎重に入ってくる。  
奥の部屋に繋がる廊下に向かって、

高木「週刊タックルの高木ですー」

反応がない。

高木「入りまーす。というか、入ってまーす」  
服や鞆についた雨水を手で拭き取っている。  
後藤が居ないことに気づいて、

高木「あれ？」  
来た方向に向かって、

高木「ちよっと、何してるの？」

雷が光る。  
後藤が、怯えながら入ってくる。

後藤「光った！」

雷が遠くで轟く。

後藤「いや」  
高木「…情けない」  
後藤「雷苦手なんですよ…」  
高木「誰か来ないか気にしている」  
後藤「鍵空いてて良かったですね」

後藤、椅子に座り、濡れた靴下を脱ぎ、  
高木「ねえ、勝手に入って大丈夫かな？」  
後藤「いいんじゃないですか、こんな天気だし」  
高木「犯罪じゃない？」  
後藤「約束してるんでしょ？」  
高木「まあ」  
後藤「大丈夫ですよ、外で待ちたくないですし」

高木、奥の部屋から良い匂いを感じて、  
高木「あ、いい匂いする」  
後藤「え？そうですか？」  
高木「うん」

後藤「しかし、今年は日本おかしいですね。今日が台風上陸でしたっけ？」

高木「うん、確か今夜だったと思うけど」

後藤「延期にしたら良かったのに」

高木「だって、今日じゃなきや駄目だって言われたんだよね」

後藤「忙しいんですかね」

高木「お腹空いた」

高木、鞆から、煎餅を出して、食べる。

後藤、ウロウロしている。

高木「ジツとしてなさいよ」

後藤「いや」

高木「なに？」

後藤「トイレ、ないなあと思って」

高木「また行きたいの？」

後藤「いや、大丈夫なんですけど、ほら」

高木「コーヒーばっか飲んでるからすぐトイレ近くなるの裕也は」

後藤「まあ、そうなんですけどね。でもまだ大丈夫ですから」

高木「そう」

後藤「それにしても不気味な場所ですね、何にも無い」

高木「そういうこと言わないの」

後藤「無戸籍者支援の会・アカシ。存在を証明するって意味でしょうけど、名前の主張が激しいですよね」

高木「まあ象徴的な言葉でいいんじゃない？」

後藤「今現在、日本には約1万人の無戸籍者が存在する。しかしこれは国が収集出来ている数字であって、本当の意味での統計はどこにもない。少なくとも1万人は存在するが、本当のことは誰にも分からない……ってこの事実、何か不気味ですよね」

高木「ちよつと不謹慎。誰かに聞かれても知らないよ」

後藤「不謹慎ですか？」

高木「裕也の取材したい川辺市子さんみたいな人が少なくとも1万人いるってことでしょ？」

後藤「分かってますよ。ほんと、日本は平和和と言われてますけど、見えてないだけで、闇なんて沢山あるんですから」

高木「闇ね」

後藤「そういう闇から犯罪だって多かれ少なかれ起こってるんですよ。多分、あの館山の事件も」

高木「犯罪者の事情か」

後藤「そう。犯罪者にも正義ってあると思うんですよ。それを許せるかどうかは、メディアが決めることじゃないと思いますけど。出来るだけ事実をね、伝える必要ってあるじゃないですか」

高木「そうね」

後藤「はい」

高木「でも私は利益があるわけじゃないのに、人の為に活動している事を取り上げる方が大切じゃないかなって思うけど」

後藤「分かりますけど、光を描く為には、闇が必要なんですよ」

高木「光と闇か」

後藤「光と闇」

高木「誰かいそうなんだけどなあ……」

後藤「井出さんでしたっけ？」

高木「そう」

後藤「おばさん？」

高木「電話の感じだと、そんなに歳取ってなさそうだけど」

後藤「へー……」

高木「なに？」

後藤「いや、別に」

高木「……ふーん」

後藤「無戸籍って、やっぱり無戸籍の人が子供を産んで、連鎖するってのが多いんですかね？」

高木「さあ、そうじゃないの？」

後藤「昔あったでしょ？何だっけ、映画で」

高木「え？」

後藤「カンヌでほら、主演男優賞獲ったやつ」

高木「ああ、うん」

後藤「何ていうタイトルでしたっけ？」

高木「知らない」

後藤「え？」



高木「知らないって」  
後藤「あ、それ。誰も知らない」  
高木「ああ、あったねそういえば」  
後藤「あれって確か無戸籍でしたよね？」  
高木「そっか、アレも実話か」  
後藤「そうそう」  
高木「かわいそうだよな」  
後藤「曜さん、そういうところあるんですね」  
高木「普通誰でも思うでしょ」  
後藤「(にやにやしている)」  
高木「なに？気持ち悪いなあ」  
後藤「好きですよ。そういうところ」  
高木「なんだそれ」  
後藤「えだから」  
高木「はいはい」  
後藤「曜さんは？」  
高木「分かったから」  
後藤「え何が？」  
高木「なに？」  
後藤「いやだから」  
高木「なに？」  
後藤「好きとかそういうの」  
高木「あ、今仕事なんだけど」  
後藤「いやまあそうですけど」  
高木「今そういうのやめてくれない？」  
後藤「え僕達付き合ってますよね？」  
高木「まあ」  
後藤「えなにそれ？僕達、結婚するんですよ？」  
高木「めんどくさい男だなあ」  
後藤「いやちよっと」  
高木「大丈夫だから」  
後藤「…本当に？」  
高木「うん」  
後藤「信じますよ？」  
高木「いや信じろよ」  
後藤「信じます」  
高木「あ、のさ」  
後藤「はい」  
高木「先にトイレ行っといたら？」  
後藤「まだ出ないもん」

高木「出しとけよ」  
後藤「えー」  
雷が光る。  
後藤「光ったー！」  
さっきより近い所で雷が轟く。  
重松雪が立っている。  
高木「あ」  
重松「……」  
高木「井出さん…ですか？」  
重松「…違います」  
高木「あ、えっと」  
重松「あなた達、誰ですか？」  
高木「あ、私、週刊タックルという雑誌の編集をしている高木曜といまして」  
重松「はあ」  
後藤「ライターの後藤です」  
高木「今日、井出さんにお話を伺うことになってまして」  
後藤「そうなんです、ははは」  
重松、黙って椅子に座り本を読む。  
高木「…風、凄いですね」  
重松「まあ」  
高木「…まあ」  
重松「……」  
高木「…はい」  
重松、じっとして動かない。  
後藤「(高木に) 何あいつ」  
高木「しっ」  
重松「……」  
高木「あの…」  
重松「はい」  
高木「あなたは…」

重松「誰か？」

高木「あ、はい…」

重松「私、記者とかそういうの嫌いなんですよね」

高木「え、あ」

重松「憶測でものを言うでしょ？」

高木「え」

重松「ただの噂好き。こっちの立場のことなんて全然考えてない」

高木「そんなことないですよ？」

重松「ありますね。腫れ物があれば、面白がって触

ってきて、記事にして、世の中が反応して、それで飽きたら次の腫れ物を見つけて、そっちに行っ

て、その繰り返し」

高木「あの、」

重松「散らかされた人達のことは何も考えない」

高木「あの、」

重松「嫌いなんです」

高木「ちよつと勘違いしてませんか？」

重松「…」

高木「あのね、報道は元々、反体制の立場で、権力

がある人達から人々を守る為に、体制批判をする

ために存在したの。社会的弱者をいじめたいわけ

でもないし、むしろ、その弱者の実態を世間に知

らしめる為に、必要なことなの。そこからじゃな

いと、何も変えることが出来ないし、声を上げる

ことが大切なの」

後藤、高木を称えるが、高木は軽くあしらう。

重松「難しい話に分からないから」

高木「だから、簡単に言えば、弱い者の味方なの」

重松「弱い人間が、立場を知られることでもつと弱

くなることだってある」

高木「それは、」

重松「勝手な正義感でしょそれ…」

高木「ねえ、あなたももしかして、ここに住んでる

の？」

重松「…そうですけど」

高木「じゃあ、あなたも」

重松「…そういうのやめてもらっていいですか？」

高木「ごめんね。でも、へえ、思ったより普通なん

だ」

葛城正枝がエプロンをつけたまま来る。

後藤と高木の姿を見つけて、

葛城「雪ちゃん」

高木「あ、すみません、勝手に入っちゃって」

後藤「鍵、空いてたんで」

雪の存在に気づいて、

高木「インターホン鳴らしたんですけど」

後藤「二回」

葛城「すみません、気づかなくて」

高木「あの、井出さんですか？」

葛城「違うんです」

高木「えっと、それじゃあ…」

葛城「すみません、ちよつと外出してまして、まだ

戻ってないみたいで」

高木「そうですか」

葛城「雪ちゃん、どうしたの？今日は18時からで

しょ？」

重松「取材ってなんの？」

葛城「ちよつとね…」

重松「なに？」

高木「(名刺を渡しながら) あの、すみません、私

週刊タックル編集部の高木曜と申します。この度

は、どうぞよろしくお願い致します」

葛城「あはい。無戸籍児支援の会・アカシの葛城で

す」

後藤、カメラの準備をしている。

気にしている葛城。

高木「何か、こんな日にすみません、延期にすれば

良かったんですけど」

葛城「いえいえ、井出が決めたことなんで」

重松にカメラを向ける。

重松にカメラを向ける。

重松にカメラを向ける。

重松にカメラを向ける。

重松にカメラを向ける。

重松にカメラを向ける。

重松にカメラを向ける。

重松にカメラを向ける。

葛城「ちょっと、すみません」

後藤「え？」

葛城「すみません」

後藤「あはい」

葛城「やめてもらっていいですか？」

後藤「え、あはい」

葛城「写真やめて貰っていいですか？」

高木「あの許可は頂いてると思うんですけど」

葛城「え？そんなんですか？」

高木「はい…」

葛城「井出から？」

高木「はい、井出さんから」

葛城「…おかしいなあ断るように言ったんですけど」

高木「…何か不都合でも？」

葛城「まああるからやめて欲しいんですけど」

高木「はあ」

葛城「写真で必要ですか？」

高木「一応週刊誌なので、写真がある方が信頼度が

上がると思いますか…」

葛城「いや、だから…なんですけどね」

高木「はあ…」

葛城「無戸籍なだけで、結構あるんですよ、世間からの偏見とか差別が」

高木「それは、はいわかります、なので色々プライバシーベートは守るように加工しますし」

葛城「いや、あのね、目に線を入れるみたいなのやっ  
でしょ？あれ、余計に犯罪者に見えませんか？」

高木「見えますかね？」

後藤「見えない見えない」

葛城「見えるでしょ…：只でさえ、犯罪者のように扱われるんですから…：拍車がかかります」

後藤「犯罪者ですか」

葛城「…」

高木「…じゃあ一度井出さんとご相談して」

重松「(遮って) いいよ。私なら撮っても」

葛城「雪ちゃん…」

重松「だって私は何も悪いことしてないから。まあ  
他は知らないけど」

葛城「ちょっと…」

高木「…」

重松「何の取材なのか知らないけど、ちゃんとした  
記事になるんですよ？弱い者の味方なんです  
よ？」

高木「ええ、まあはい」

後藤「(カメラを向ける) それじゃ、ちょっと失礼し  
て」

葛城「あの、やっぱりやめて貰えますか？」

井出が入ってくる。

葛城「陽子」

井出「すみません、お待たせしまして。どうしたの？

大きい声出して。外まで聴こえてたよ」

葛城「雪ちゃんの写真撮ろうとするから止めてたん  
だけ」

井出「ああ…」

葛城「写真、許可したの？」

井出「うん」

葛城「どうして？」

井出「どうしてって」

葛城「取材は慎重に受けたいって言ったじゃない」

井出「うん、分かってる」

葛城「じゃあどうして？」

井出「ちょっとでも目に留まって貰う人が多い方が  
良いでしょ？せつかく記事になるんだし」

葛城「でも」

井出「ひっそりと活動するより、知られていかな  
いとダメじゃない？」

葛城「…まあ、でも本人達のこと考えたら」

井出「うん。それは分かってるから」

葛城「本当に？」

井出「(高木と後藤に) ごめんなさいね。うち、そ  
こまで取材になれていなくて。気分悪くさせてし  
まったらごめんなさい」

高木「いえ」

後藤「全然」

高木「こちらこそ無神経だったと思います」

井出「あ、代表の井出です」

高木「あ、改めまして週刊タックル編集部の高木で

す」

後藤「ライターの後藤です」

高木「今日はありがとうございます」

井出「いえいえこちらこそ、日程わがまま言っちゃ  
っつ」

後藤「それでその、写真、やっぱり駄目ですか？」

高木「ちよっと」

葛城「どうしてそんなに必要なんですか？」

後藤「そりゃ、読者は当事者の雰囲気見たいと思っ  
ますから」

高木「(後藤を制して)今はいいって」

後藤「えいいんですか？」

高木「すみません本当に」

後藤「必要ですって」

葛城「当事者の写真があればいいんですよ？」

高木「え」

後藤「はい」

葛城「じゃあ、スタッフだけでいいですか？」

後藤「え？」

葛城「うちの取材なんですよね？」

高木「はいもちろん」

葛城「だったら代表者だけで良くないですか？」

インターホン。

葛城「なに？」

井出「もう一つ、ちょっと悩んだんだけどね」

葛城「なによ？」

重松が松山有紗を連れて戻ってくる。

重松「ありさだったんだけど」

葛城「え、どうしたの？」

松山「井出さんに呼ばれて」

葛城「陽子に？」

井出「来てくれてありがとう」

松山「ご無沙汰しています」

葛城「うん…元気にしてた？」

松山「おかげさまで。全然連絡してへんくてすみま  
せん」

葛城「ううん、元気なら良かった」

後藤「関西弁…」

松山「(後藤と高木を見る)」

高木「あ、お邪魔してます、今日ちょっとアカシさ  
んの取材で」

松山「取材？」

葛城「陽子、どうしてありさを呼んだの？」

月子が紛れ込んでいる。

葛城「……」

後藤「……」

重松「誰か来たけど？」

葛城「雪ちゃん、みてきてくれる？」

重松「…分かった」

井出「ごめんね」

重松、玄関に去る。

後藤「あのね、無戸籍者本人の雰囲気分からない  
と結局実態が見えないじゃないですか？」

葛城「いやだから、アカシの取材ですよ？どうし  
て無戸籍の子の写真が必要になるんですか？」

後藤「(井出に)話してないんですか？」

井出「…すみません、まだ」

井出「ごめんね、正枝」

葛城「説明してよ」

井出「うん…実はもう一つ別の取材もあって」

葛城「もう一つ？」

後藤「館山の事件、覚えてませんか？」

葛城「え？」

井出「可能性の話なんだけど」

葛城「可能性って」

重松「何？」

後藤「その事件で亡くなった身元不明の遺体が、こ  
こに居たって伺って」

松山「遺体？」

重松「誰？」

井出「市子さん」

松山「え」

葛城「それって月子ちゃんのこと？」

高木「月子…？」

井出「そうね、月子ちゃん」

重松「えなに？どういうこと？」

後藤「死んだんです、彼女」

音楽。

#### 4 月子の電話 2016年3月25日

月子「あの、もしもし、そちらは無戸籍のことを相談に乗って下さるところでしょうか？新聞で電話番号を見つけたもので…」

月子「あ、そうです。私が…無戸籍です。…年齢は、28です。1987年生まれです…」

月子「…家は…ありません。住民票も…母は行方不明です。父は、会った事ありません。あの…戸籍が取れるというのは本当ですか？」

月子「私の名前は、市子です。川辺市子といいます」

暗転。

#### 5 市子と月子 2018年9月2日

台風の音が響く。

高木と後藤と向かい合って、

井出と葛城が対峙している。

少し離れたところに、重松と松山もいる。

高木はメモ帳を見ながら、

映像 事故現場

高木「本籍・住所・氏名不詳。年齢20代後半から30代前半女性。身長153センチメートル前後、黒色のワンピース、白の下着、カップ数C65、

茶系のサンダルSサイズ。上記の者は、平成29年11月21日午前7時45分頃、千葉県館山市見物787-2、県道257号線、館山消防局前交差点、西に700メートル、見物海岸付近において、水没している軽自動車アルトの中から白骨化した遺体として発見されました。死亡場所においては、発見された車内。死因は溺死。同乗していた男と心中を試みたと思われる。死亡年月日は、車と遺体の酸化状態から、平成26年頃から平成28年頃と推定。身元不明のため火葬に付し、遺骨は保管してあります。心当たりの方は、当市福祉事務所まで申し出てください。平成29年12月20日、千葉県館山市福祉課、池上寛」

後藤「これは、国立印刷局が発行する官報に掲載される行旅死亡人についての記事です。要約すると館山の海岸から見つかった軽自動車の中に、行旅死亡人、つまりは身元不明の女性の遺体が発見されたっていうことです」

高木「この死亡していたもう1人の男性ですが、車の所有者ナンバーを調べたところ、北秀和さん27歳だと分かりました」

映像 北秀和の顔写真

葛城「北秀和…」

松山「あ、この人」

井出「…知ってるの？」

松山「…ううん、勘違いです」

後藤「勘違い？」

高木「(写真を見せて) 見覚えありませんか？」

葛城「思い出した。ほら、一度、川辺市子を探してらって尋ねて来た人」

井出「…ああ。でも、こんな人だったっけ？」

葛城「多分そうだったと思うけど」

高木「この身元不明のご遺体が、その川辺市子？月子？さんだと思いますが…」

後藤「名前、どっちなんです？」

井出「名前？」

後藤「さっき、言い直してませんでした？」

井出「ああ…源氏名というか、結構多いんですよ。」

自分の本当の名前が後々分かるのか…生活名と  
本名が違うというか…」

後藤「(メモしながら)へー」

高木「それで、その…本名は？」

井出「それが…本当の所が分からなくて。多分月子  
ちゃんが本当の名前だとは思っただけで、どう使  
い分けていたのか」

後藤「どういうことですか？」

井出「あの、もう一度確認ですけど、私達は無戸籍  
の実態を記事にして貰えるって思っただけで  
すよね？私達が活動している、この無戸籍児支援  
の会を記事にして頂くということ…？」

高木「それで大丈夫ですか？」

葛城「絶対にその館山の事件と絡めてうちのことを  
書いて欲しくないんですけど、大丈夫ですか？」

高木「ええそれはもう、はい」

井出・葛城「……」

後藤「大丈夫ですから。ちゃんと記事は別にして書  
きますから。ただ、僕がね、個人的にこの事件も  
追っただけで…おかしいんですよ…何か臭うとい  
うか…少し調べてたら、その川辺市子って人物に  
ね、行きついたらんですが…どうも存在しない人間  
のようで…ははは」

高木「情報提供という形ですので、絡めませんので」

葛城「じゃあ、やっぱり私達の記事は、つい…と

いうことですか？」

高木「いえいえまさか、ねえ」

後藤「はい全然そんなことは、ねえ」

井出「まあ記事にしてくれるならいいじゃない。ギ  
ブアンドテイク」

後藤「そうギブアンドテイク」

葛城「…はい」

後藤「ありがとうございます！で、その名前が分か  
らないというのは？」

井出「実は、川辺市子って名前であち尋ねて来た

人物が2人居まして…」

高木「2人？」

後藤「それは同一人物だったかではなくて？」

井出「違います。2人とも顔が違いましたから」

松山「あの」

少し間。雨の音が響いている。

井出「なに？」

松山「その死んだんは、どっちなんですか？」

後藤「…どっちなんでしょう？」

高木「お二人とも、戸籍は取得したのですか？」

井出「いえ…ダメでした」

後藤「それはどうして？」

葛城「よくあること…と言うとあれなんですけど、2  
人とも成人していたから、結構その年齢から取得  
するのって困難なことが多くて」

高知「え？どうしてですか？」

葛城「(雪を気にしながら)親がはつきりしていたり、  
772条のような問題ならね、認知調停が進めば  
良いんだけど…」

高木「772条…？」

井出「離婚後300日問題って聞いたことない？」

高木「知ってはいるんですけど…」

重松「そんな中途半端で取材に来たんだ…」

高木「…すみません」

後藤「前の夫との離婚が成立した日から300日  
以内に違う男との子供を出産した場合、その子供は  
前の夫の子供と推定される」

高木「え？」

後藤「嫡出推定制度ですよね？」

井出「はいよくご存知で」

高木「あの、じゃあその市子さんは？どういう理由  
で？」

井出「背景が分かりにくかったの。親は居ないって  
言うし、育ての親は死んで、本当の親だったか分  
からないって言うし…」

高木「えっとつまり…？」

重松「バカなの？捨て子だったってことでしょ？」

高木「あ、なるほど」

後藤「それで？」

重松「親が分からない場合は、自分自身が日本人で  
あるという証明が必要な。その為の裁判をしな  
いといけない」

後藤「それが難しいってこと？」

重松「大人になってからだど、今までどうやって生きて来たのか怪しまれんの。海外からのスパイじゃないか？とか、そんなこと言われたって、違うし、私は…日本語しか喋れないし、今更日本人じゃないとか言われたって、じゃあ、どうしたらいいわけ？」

後藤「…急に喋りますね」

葛城「雪ちゃんは、今まだ裁判中なんです」

後藤「なるほど…で、川辺市子は2人ともそうだった？」

井出「ええ。その手続きの途中で2人共急に頓挫しちゃって。まあ、1人目は1日だけだったから、すぐに居なくなっただけか、私しか会ってなくて」

後藤「時期はいつ頃なんですか？」

井出「1人目は確か…2年前くらいかな。2016年の1月だったと思う」

後藤「2人目は？」

井出「あれは、確か桜が咲いた頃だったと思うけど…」

葛城「百子がいれば詳しいこと分かんと思うんだけど」

後藤「百子？」

井出「うちで戸籍を取得した子です」

葛城「ありさ、連絡取ってる？」

松山「あれからは全然…電話してみます？」

葛城「うん」

松山、携帯で電話をかける。

百子と月子が、楽しそうにやってくる。

①と②の会話が同時に進行する。

①

月子「モモちゃん、これ歌ってよ」

百子「えー、嬉しい」

月子「へへへ」

百子「ちよっと待って準備」

月子「うん」

百子、楽譜を開く。

月子、じっと百子を見つめている。

月子「どうしようかなあ」

百子「どうしたの？」

月子「んーん、どこで聴こうかなあって」

百子「どこでもいいじゃん」

月子「大事なの」

百子「よし、じゃあ、歌うよ」

月子「うん」

②

井出「結構前から音信不通になっちゃって…」

重松「仲良かったよね、2人すっごく」

高木「へえ…」

松山「あれ」

葛城「…繋がらない？」

松山「この番号使われてへんって…」

井出「うそ…」

葛城「あの子に限って電話番号変えたこと言わないなんて無いと思うけど…」

高木「いつから…ですか？」

井出「え？」

高木「その、百子さん連絡取れなくなったのって」

6 百子の戸籍取得 2016年8月12日

百子の部屋に月子が現れる。

百子はギターを弾き、

ハナレグミ「深呼吸」を歌う。

歌い終わり、

2人くすくす笑い合う。

月子「モモちゃんの為にね、贈りたい歌を見つけようと思ってね。歌って貰うんだけどね」

百子「笑って」ありがとう、何かさ、この歌のこ

こ、誰かがぼくを呼んだような、振り向くけど

君はいない…ってとこね」

月子「うんうん」

百子「昨日までの私が、今日からの私に手を振って

くれているみたいでさ」

月子「うんうん」

百子「その私がおね、笑って見送ってくれているみたい  
に思えて来て」

月子「ははは」

百子「昨日までの私は、ちゃんと」

月子「うん」

百子「ちゃんと生きてきたよーっていうか」

月子「うんうん」

百子「しんどいこと沢山あったけど…ははは」

月子「モモちゃん」

百子「？」

月子「戸籍取得、おめでとう」

百子「(目に涙が溢れている) ありがとう」

月子「へへへ」

百子、曲を改めて感じ、

百子「お父さん、どう思ってるかなあ」

月子「安心してよ」

百子「何にもしてくれなかったし、嫌いにもなった  
たりしたけど」

月子「うん」

百子「いつも笑って、歌ってばかりで」

月子「いいじゃん、笑ってるのは」

百子「それはね」

月子「それはね」

2人、笑い合う。

百子「私はさ、音楽があったから、まあ何とか明る  
く生きれこれたんだろうな」

月子「いいじゃん」

百子「初めて市子ちゃんが、私の曲聴いてくれた時、  
凄く綺麗な目してる子だなあって思ったんだ」

月子「えーそうなの？」

百子「うんうん」

月子「どんな目…してた？」

百子「何にもまだ知らない目」

月子「なにそれ、知ってるし」

百子「知ってるし」

月子「はは」

百子「こんなに仲良くなれて嬉しいよ」

月子「私も、嬉しい」

百子「友達」

月子「友達…」

百子「大丈夫」

月子「え？」

百子「市子ちゃんも、戸籍絶対取れるよ」

月子「…：うん」

百子「私、学校行ってなかったからさ、これから夜  
間中学通おうと思ってるの。沢山取り戻さなきゃ」

月子「へー」

百子「市子ちゃんは、学校通ってたんでしょ？」

月子「あ、うん…でもそれ内緒ね」

百子「分かってる。勉強、沢山教えてね」

月子「教えられるかなあ」

百子「私、沢山これからしたいことあるもん」

月子「音楽は？もうしないの？」

百子「そりや音楽も続けるよ」

月子「(嬉しそう) そっか」

百子「？…どうして？」

月子「じゃあ、いつか、いつかね…」

百子「なに？」

月子「私の書いた歌詞、歌にしてよ？」

百子「えうん。ほんと？絶対する。凄いなそれ」

月子「凄いなそれ」

2人笑い合う

市子がそこにやってくる。

百子の照明が消えて行く。

7 再会 2016年3月13日

市子「月子」

月子「…」

市子「…分かる？」

月子「…うん」

市子「うん」



月子「うん」

市子「…久しぶり」

月子「うん」

市子「痩せたな」

月子「……」

沈黙が続く。

市子「ニュース観た？」

月子「観た」

市子「……」

月子「なんでここ分かったの？」

市子「Facebook。してるやろ？」

月子「あうん」

市子「…標準語」

月子「え？」

市子「標準語や」

月子「あうん」

市子「いつからこつち来とったん？」

月子「あの後すぐ」

市子「ほんなら8年？」

月子「……」

市子「…もう、行くところないねん」

月子「…入る？」

市子「うん、ありがとうやで」

月子と市子、居なくなる。

音楽。



百子「もしもし、井出さん？私、百子です。あのね

…あの、市子ちゃんは、市子ちゃんじゃなくて、

…その、わかんないんだけど、私、どうしたらいいんだらう…」

井出「ねえ、本当は私にも話してないことがあるんじゃない？」

月子「え」

井出「私に話すのも怖い？」

月子「……」

井出「前にね、あなたと同じ名前の人と会ったことがあるの」

月子「え？」

井出「川辺市子」

月子「……」

井出「その人は、何者なの？」

月子「それは…私です」

井出「どういうこと？」

月子「……井出さん」

井出「なに？」

月子「……」

井出「百子ちゃんと会ってるの？」

月子「え」

井出「ありさとも会ってるでしょ？」

月子「え」

井出「2人とも、詳しいこと話してくれないけど…

あなたのこと凄く心配してるのが分かるの」

月子「……」

井出「本当のこと、話してくれない？力になれると思うから」

月子「……本当のことは私が知りたいです」



葛城「ねえ、少しでもいいから思い出して？」

月子「えっと」

葛城「大阪のどこに住んでたの？何でもいいの。何ていう駅だった？駅前には何があった？覚えてる

お店とか、風景とか、何でもいいから」

月子「…葛城さん、どうしても私は信じてもらえないの？」

葛城「疑われてると思ってる？」

月子「家族って何ですか？」

葛城「え？」

月子「子供を産むってどういう感じですか？」  
葛城「…堪え難い喜びを得るような感じかな」

月子「へー」

葛城「うん」

月子「可愛いですか？子供」

葛城「うん、そりや、うん」

月子「…私のお母さんは」

葛城「うん」

月子「嬉しくなかったのかな？私が産まれたこと。

可愛くなかったのかな？私のこと」

葛城「……」

月子「家族、私も持つことできるのかな？」

葛城「うん」

月子「いつか普通の家族みたいに、私も…」

葛城「できるよ」

月子「私は、ちゃんと子供のこと愛せるのかな」

葛城「…大丈夫。その為に、思い出して。大阪のど

こに居たのか、どういう人達と出会って来たのか、

月子ちゃんがそこに居たこと、証明させなきゃ」

◆

月子「月子、戸籍の取り方分かってん」

月子「そうなん？」

月子「でも、ちょっと大変そうだな」

月子「うん」

月子「うち、いっぱい嘘ついてきたし、悪い事もし

てきたからな、ホンマのこと、言えへんこといっ

ばいあってな」

月子「…うん」

月子「やから、かわりに手続きしてきてくれへん？」

月子「え」

月子「そしたら、もう月子に迷惑かけへんから」

月子「えー…」

月子「ごめんな…これで最後にするから」

月子「……」

月子「うちの代わりに」

月子「…代わりばっかやん」

月子「はは…ほんまや」

月子「うちらって何でおるん？」

月子「わからん」  
月子「わからん」

◆

松山「どうしたん？」

月子「ありさ」

松山「ん？」

月子「会って欲しい人がいて」

松山「会って欲しい人？」

月子「うん、ありさにだけ」

松山「うちにだけ？」

月子「そう。だから内緒にしといてくれる？」

松山「いいけど、誰？」

月子「この間、ここに来た男の人」

松山「月子ちゃんのこと探してた人？」

月子「そう」

松山「変な人やったけど、やっぱり知り合いなん？」

月子「会ってくれたら説明する」

松山「分かった」

◆

重松「月子」

月子「(反応しない)」

重松「月子？」

月子「あ、うん」

重松「どうした？ポーツとして」

月子「何もない」

重松「じゃあ、私と同じ部屋だから」

月子「うん」

重松「私は雪」

月子「雪ちゃん」

重松「うん」

月子「可愛い名前」

重松「…雪が降る日に産まれたらしい」

月子「へー」

重松「嘘かもしれないけど」

月子「嘘…？」

重松「今までどうやってきたん？」

月子「え？」  
重松「住むとことか、お金とか」  
月子「ああ、友達とか、男の人の家とか」  
重松「へー」  
月子「転々としてきた」  
重松「友達」

◆

月子「モモちゃん」  
百子「なに？」  
月子「いつここ出て行くの？」  
百子「来月には出なきゃかな」  
月子「そっか」  
百子「でもまた会おう？」  
月子「ねえ、どうしてギター弾けるの？」  
百子「お父さんが教えてくれた」  
月子「そのギターもお父さんの？」  
百子「うん」  
月子「お父さんって優しい？」  
百子「多分。でも他があんまりわからないから」  
月子「またあの歌歌って？」  
百子「どの歌？」  
月子「初めてモモちゃんが歌ってくれたときの」

◆

月子「でも、もし、とか無いから」  
重松「なにそれ」  
月子「どういう気持ちなのかなーって」  
重松「え？」  
月子「雪ちゃん、お母さんに」  
重松「憎いよそれは」

◆

松山「うちはお母さんが前の人と離婚できてへんかったから、ほんまの親の戸籍に入れへんかったらしくて、でも学校には中学までは行ってるねん。お母さんが校長先生に状況説明してお願いしてくれたりしてくって」  
月子「へー地元はどこだったの？学校の名前は？」  
松山「大阪やけど…学校は門真中学」  
月子「お母さんは？」  
松山「大阪におるよ」  
月子「お父さんは？」  
松山「どこにおるか分からん。だから探偵に探してもらってる」

◆

重松「タイムマシンがあるなら産まれた日に行ってみたい」  
月子「行ってどうするの？」  
重松「私を捨てた母親を一目見たい」  
月子「見てどうするの？」  
重松「分らないけど」  
月子「好きなんだ、やっぱりお母さん」  
重松「全然。記憶ないから」  
月子「なんかね、本当の母親を求めるのって本能なんだって」  
重松「へー」  
月子「私もタイムマシンがあったら」  
重松「うん」

井出「それじゃ学校には行ってたの？」  
月子「行ってません」  
井出「小学校も？」  
月子「はい」  
井出「無戸籍だって知ったのはいつ頃？」  
月子「15歳のとき…」  
井出「それはどうやって知ったの？」  
月子「お父さんが…」  
井出「お父さん？」  
月子「育ててくれた人」  
井出「その人とは血が繋がってるの？」  
月子「繋がってないみたいです」  
井出「じゃあその人は誰なの？」  
月子「私のお母さんと親しい人だったみたいで」  
井出「お母さん誰か分かる？」  
月子「お母さん、ほんまのこと言ったらあかんぞ」

月子「え」  
市子「あかんで。うちら人殺してんのバレてまうで」  
月子「あうん」  
井出「その育ててくれた人はどこにいるの？」  
月子「えっと…」  
井出「ゆっくりでいいから」  
月子「お父さんは死にました。自殺です。電車に飛び込んで。お母さんは誰かも知りません。生きてるのかも知りません。それ以上何も分かりません」

◆

葛城「諦めるの？」  
月子「諦めるというか…」  
葛城「なに？」  
月子「私はきつと本当のこと言えないから」  
葛城「大阪まで来たのに？」  
月子「来たから思っせん」  
葛城「何か思い出したの？」  
月子「思い出した。言えへんけど」  
葛城「関西弁」  
月子「やっぱりあかんことはあかんから」  
葛城「市子ちゃん？」  
月子「うちは月子って言うねん」  
葛城「え？」  
月子「戸籍もあるねんほんまは」  
葛城「え？」  
月子「葛城さん」  
葛城「ちよつと待って」  
月子「娘さんが産まれたときの気持ちとか、どんな風に笑うのかとか、どんな風に抱きついてくるのかとか、わがまま言うのかとか、聞かせて欲しい」  
葛城「え…」  
月子「うちこのまま、アカシには戻らんから」

◆

なつみ「月子」  
月子「お母さん、どこにおるの？」  
なつみ「ごめんやで」

月子「なんで、うちを捨てたん？」  
なつみ「捨ててへんから」  
月子「うちらは何で離れて暮らさなあかんかったん？今な、大変な時やねん。お姉ちゃんも、めっちゃ大変でな、うち一人やったら抱えきれへんから、お母さん助けて欲しいねん。何で助けてくれへんの？うちらのこと嫌い？」  
なつみ「好きに決まってるやろ」  
月子「うちらは誰？」  
なつみ「うちの大事な娘や」  
月子「そしたら何で一緒に暮らせへんかったん？どこまでがほんまのことなん？何か隠してるん？」

◆

市子「タイムマシンがあつたらなあ」  
月子「ドラえもんがおつたらなあ」  
市子「あの日に戻れたらなあ」  
月子「あの日ってどの日？」  
市子「そやなあ」  
月子「お父さん殺した日？ツキコの呼吸器外した日？」  
市子「はは、それはもう手遅れやし」  
月子「うん」  
市子「あの日、覚えてる？月子小さかったやろ？」  
月子「なんとなくしか覚えてへんけど」  
市子「うちも。何となくしか覚えてへんけど」

暗転。

9 小泉ツキコの存在 2018年9月2日

台風が近付いている。  
舞台には、アカシの面々と、高木と後藤が居る。  
ステージでは、月子が一人勉強している。

後藤「あの、川辺市子について、実は前に追っていた事件があるんです。それでちよつとお聞きした

いのですが？」

井出「はい：何ですか？」

後藤「その川辺月子って人物は、川辺市子とは違う人なんですよね？」

井出「さっきも言いましたけど」

後藤「あの、あのですね、僕が知っているのは、その川辺市子の妹が川辺月子という人物だと聞いているんですね」

葛城「妹？」

後藤「そう。おそらく2人が姉妹であることは間違いないと思うんです。だけど妹の川辺月子さんは、2008年に死亡しているんです」

葛城「え？」

後藤「ただ、その月子さんの遺体は2015年に発見されたので7年間見つかっていなかったんです……」

葛城「私達が出会ったのは2016年だったから、死んでないと思いますけど」

後藤「いや、でも戸籍を確かめたんで、間違いないんです。死亡と記載されてましたから」

松山「川辺月子は既に死んでたってこと？」

後藤「そういうことになります」

高木「えちよっと待って、分かんないんですけど」

後藤「えっと、僕も今混乱してて分からないんですけど、このアカシに現れた川辺月子は、川辺市子のために、戸籍を取得しようとしていた可能性があるんじゃないかと」

井出「……」

後藤「だけど、さっきも言いましたけど、月子さんは2008年に既に死んでいるはずなんです」

重松「本当は生きてたってことじゃないの？」

後藤「いや、僕もそう思ったんですが違うと思います」

重松「何で分かるの？」

後藤「川辺月子は筋ジストロフィーという病気だったんですよ」

重松「なにそれ？」

後藤「難病です。筋力が衰えていく病気なんですけど、幾つか型があって、川辺月子は福山型だったみたいです」

高木「福山型？」

後藤「その福山型というのは、筋力が発達しないだけじゃなく、99%の確率で知的障害も併せ持つて産まれてくるそうです」

重松「え、ちよっと待って、ついていけない」

後藤「えっと、筋力が成長しないので一生自力で立つことも出来ないんです」

高木「……つまり歩けないってこと？」

後藤「そうですね」

重松「いやでも歩いてたよね？」

葛城「うん。普通にちゃんと歩いてた」

松山「それに知的障害でも無かったけど」

後藤「そう、だからおかしいと思いませんか？」

葛城「あの子は月子ちゃんじゃないってこと？」

後藤「いいですか？その難病の月子さんは2015年に生駒山で白骨化した遺体として見つかったんです」

月子が、ふらりといなくなる。

高木「あ、その事件覚えてる」

後藤「うん。で、その事件に関わっていたのが、川辺市子と、館山で亡くなった北秀和という人物なんですけど……」

松山「北秀和……」

後藤「そう。おそらく一緒に見つかった身元不明の遺体が、川辺市子じゃないかと僕は思っています」

高木「ちよっと、全然分からないんですけど？」

後藤「ですよね……」

井出「……」

後藤「川辺市子は無戸籍者です。川辺家の戸籍にそんな名前は見当たりませんでした。妹の川辺月子の名前はあったんです。ただ、さっきも話した通り、難病の持ち主で既に死亡していました。ここまではいいですか？」

葛城「はい」

後藤「で、周囲を取材して分かったんですが、姉の市子は、妹の月子として、小学校に入学していたんです」

高木「えどういうこと？」

後藤「市子は、9歳で小学校に入学して、川辺月子という名前で登校していたんですよ」

高校生の市子が、ふらりとやってきて、ステ  
ージ上で勉強しはじめた。

葛城「なりすまし？」

後藤「そうです。姉と妹が、身体だけすり替わって  
いたんだと思います。戸籍上」

重松「…あり得る」

高木「でもどうして？」

葛城「妹が歩けない難病だったとしたら、その戸籍  
を姉のために使った」

後藤「僕もそう思います」

重松「むかつく…」

葛城「じゃあ本当に姉妹だったって証拠は？」

後藤「2人の母親である川辺なつみにも一度接触し  
たんですが、その時に裏付けるような証言も取れ  
ていません」

高木「館山で亡くなった遺体が自分の娘だと主張し  
ていたんだっけ？」

後藤「そう。でも、既に戸籍上には生存している娘  
は誰もいないわけです。でも母親はこう主張しま  
した「月子は死んだけど、市子は無戸籍で存在す  
る。もう1人娘がいるんです」って」

井出「私が会った2人の市子ちゃんは2人とも母親  
は知らない、居ないって言うってんだけど…」

高校生の月子がふらりとやってきて、

市子とは別で再び勉強し始める。

後藤「おそろく嘘でしょうね」

葛城「お母さんに会って確かめないと」

後藤「それが出来ないんです」

葛城「どうして？」

後藤「母親は、この館山の遺体発見後に自殺してい  
ます」

井出「え…」

後藤「いいですか？難病の川辺月子は2008年に  
死亡。母親は2018年に自殺。無戸籍である川

辺市子が、館山で発見された遺体なのだとしたら、  
既に死亡しているんです」

高木「もう誰も生きていない」

後藤「となると、そのもう1人の川辺市子を名乗っ  
ていた女性、その人は誰なんですか？」

重松「私達が一緒にいたあの子は…」

後藤「誰？」

井出「……」

松山「…あの、うち、ちょっと知ってることあって」

後藤「……」

松山「北秀和って男のことですけど…」

## 10 父親殺し 2008年9月頃

松山「うち、ここで2年前に戸籍を取得した松山あ  
りさって言います。関西出身ってのもあって、月  
子とここで暮らすことになったとき、色々喋ったり  
したんです。なんか、よくありさにだけ話すって  
言ってくれて。それで、うちが戸籍取得出来て、  
アカシも出て、契約社員やけど、仕事も決まって、  
今から頑張らなって思ってた時に、月子から連絡  
が来て。確か会わせたい人がおるって言われて。  
うちにだけやから井出さんとかにも黙ってて欲し  
いって言われて。で、その会った人が、北秀和っ  
て男やったんです」

後藤「それっていつ頃のことですか？」

松山「えっと、蝉がよう鳴いてたし、暑い日でした」

後藤「夏…」

松山「あの、ちょっと色々知ってるんがあるんす  
ぎ、これ…何から話したらいいんやろう…」

井出「……」

松山「(混乱してきて) あえっとその、とにかく、  
うちはその難病の川辺月子さんって人のことは分  
からなくて」

葛城「ありさ。落ち着いて、無理しなくていいから  
話せることだけ話して？」

松山「…井出さん」

井出「なに？」

松山「今日ってこの取材の為に、うちや雪ちゃんを

呼んだんですか？」

井出「そうね、それもあるかな。でも、こんな話をみんなですることになるとは思ってたかった」

松山「こんな話？」

井出「月子ちゃんのこと、私も知らないことが沢山あった。知らないやいけないって今思ってる」

松山「うちも、ハッキリ覚えてるわけやないんです」

井出「それでもいいから、話してくれる？」

松山「はい……」

クマゼミが鳴き始める。

松山「北秀和は、川辺市子さんの高校時代の同級生らしくて。それで、うちが聞いたのは、2008年の2人が高校生やった時のあつつい夏の事で」

ステージ上では、市子と月子が勉強をしている。

市子「なあ、あの子が死んだ理由、おっちゃんに話した？」

月子「話してへん」

市子「なんであんなことしたん？」

月子「アイス食べさせてあげようと思って」

市子「……嘘やろ？」

月子「……」

市子「お母さんにはうちがやったって言うてるから。月子もそれに合わせてな」

月子「……なんでほんまのこと言わんの？」

市子「(笑って) え？」

月子「うちのこと何でかばうん？」

市子「お姉ちゃんやからな」

月子「……なにそれ」

市子「ええやろ、それで十分やろ」

松山「そこに、小泉って男が来たらしくって」

小泉がステージの周りをウロウロしている。

小泉「なつみさーん」

市子「おっちゃんや」

月子「えなんで？」

市子「酔っぱらってたまに来るねん」

小泉「市子ー。おるんやろ？開けろー」

市子「ちよっと待ってください」

小泉「はよあけろ、外あつついねん」

市子「月子隠れ、どこでもええから」

月子「えでも」

市子「あんたがここに来てんの分かったらおっちゃん、また機嫌悪なるから」

月子「でも」

小泉「なにしとんねん！」

市子「はよ」

月子「あうん」

市子「今開けますー！」

市子が家の扉を開く。

小泉が上がり込んでくる。

月子は身を潜めている。

小泉「はよあけろや」

市子「すいません、おしっこしてて」

小泉「なつみさんは？」

市子「仕事です」

小泉「昼からか？」

市子「お金、おっちゃんの仕送り少ななったから」

小泉「……月子に金必要やからな。市子とちやうくて、

未来あるんやあの子は」

市子「……そうですね」

小泉「あー、あつついなあ」

市子「……」

小泉「なつみさんはずるいで。嘘ばっかつきよる」

市子「……」

小泉「一個の小さい嘘は、嘘でしか守れへん」

市子「……」

小泉「あの子はほんまに死んだんか？」

市子「…死にました」

小泉「嘘つくなや…まだ元気やったやんけ」

市子「……」

小泉「葬式もしてやれんで、お前みたいなやつのはに」

市子「……」

小泉「お前のせいで全部始まっとんねん」

市子「分かってます」

小泉「ほんまのこと教えてくれや」

市子「ほんまですから」

市子はその場に座り込み、股を開く。

市子「月子にだけは優しくしたってください」

小泉「お前ら親子は…ほんまに悪魔やな」

小泉、市子を強姦する。

市子の悲痛の音が漏れる。

月子「やめて」

小泉「月子、なんでおんねん？」

月子「うちが殺しました」

小泉「は？」

市子「月子」

月子「お姉ちゃんとは関係ないから、うちが呼吸器外してん」

小泉「(市子に)ほんまか？」

市子「嘘に決まってるやろ」

小泉「なんやねんお前ら」

月子「嘘ちゃう。殺したから」

小泉「月子ほんまか？」

踏切の音が聞こえてくる。

市子「うちが殺してん。気色悪かってん。うんこの世話とか、夏はたまらんねん。おっさんには分からんやろ。あんたの娘めっちゃきつしよく悪かってん」

小泉「お前も殺したろか！」

市子「やってみ！」

小泉「やったるわ！」

月子「やめてー！」

電車のクラクションが鳴り、通過する。

人が轢かれた嫌な音が強烈に響く。

気づくと、小泉、市子、月子の姿は無い。

蝉の音も消えて、台風音が響いている。

松山「市子さんが、その小泉って男を包丁で刺して、

そこに北秀和がやってきて、近くの線路に遺体を

寝転がせて、人身事故に見立てたって…」

高木「北秀和がそこに？」

重松「ちよっと信じられない」

松山「北秀和は、市子さんのストーカーやったんです。だから、偶然この日も家の近くに来て、男の人の悲鳴聞こえて、飛び込んだらしいです」

高木「ストーカーって」

後藤「それ、多分本当の話ですなね」

高木「その、月子さんと北さんが、ありさんを尋ねて来た理由って何だったんですか？」

松山「2人とも、行き場を失ってるみたいな感じでした。アカシでは戸籍取るのは無理やったから、

他に市子さんが戸籍取れる方法ってない？って聞かれて」

高木「どうして、アカシでは無理だったんですか？」

葛城「多分、月子ちゃんは、市子さんの戸籍を取る為に、どこにも居ない架空の人間として戸籍を取ろうとしてたんだと思う。でも、その方法では自分

が何者かを証明しきる事はほぼ不可能」

重松「裁判はそんなに簡単じゃないから」

高木「てか、それってそもそも犯罪じゃ？」

葛城「そうですね」

松山「その時、北さんが言ったことがあって」

井出「なに？」

松山「市子さんを、殺してあげることが救ってあげることちゃうか…って」

高木「え？じゃあやっぱり館山の遺体って」

後藤「川辺市子…」

高木「北と一緒に死んだ…ストーカー…え心中未



「遂？」

松山「うちもそう思っただけ、でも」

高木「でも？」

松山「そんな時、北さんが本気づっぽかったから、うち、背乗りって、なりすましの事件が震災の後、あったから、そのこと教えてあげたんです」

後藤「背乗りって？」

松山「あえっと…」

井出「例えば、身寄りがいない人間が、津波で流されて遺体が上がらなかった場合、その人が居なくなつたことに誰も気づかなかつたら、死亡届けが出されないでしょ？」

後藤「はい」

井出「そういう人を見つけて、その人になりすまして、戸籍を売買したり、そういう犯罪のこと」

高木「でも2人は死んでますけど？」

重松「その女の人は身元不明なんですよ？」

高木「あはい」

後藤「ということは…」

葛城「可能性がある」

高木「え何が？」

後藤「曜さん、だから、その遺体が市子さんじゃない可能性があるってことですよ？」

高木「…あ」

後藤「誰も知らない、他人が変わりに殺されたかもしれない」

高木「でもさすがに」

後藤「さっきの話しが本当なら既に殺人犯ですよ？」

高木「殺人犯」

井出「…百子かも」

葛城「陽子」

井出「百子と連絡取れなくなったのって？」

松山「その館山の事件の後すぐ」

高木「繋がった…」

重松「無いつて。だって、月子と百子、凄く仲良かったじゃん」

後藤「ありささん、その後、2人には会ってないんですか？」

松山「北さんには会ってません」

後藤「川辺月子には会った？」

松山「月子と、市子さんに、一度だけ」

後藤「どこで？」

松山「調布にある月子の家で」

高木「調布…」

後藤「いつ頃？」

松山「その後、結構すぐに会いました」

高木「ちょっと待って」

高木が館山事件のメモを確認する。

高木「さっき夏って言っていましたよね？」

松山「はい」

高木「それって2016年の夏？」

松山「戸籍取れてすぐやったんで、はい」

高木「てことは、その数ヶ月以内に館山の事件は起きてる」

葛城「え？」

高木「遺体が発見されたのは、2017年11月21日。亡くなったのは、その1年から3年前と断定されてる」

後藤「北は2016年夏頃はまだ生きていた」

井出「ありさ、それで、その後、どうしてまた会ったの？」

松山「…北が市子さんを殺すかもしれないし、月子は、やっぱり巻き込まれてるから助けたくて」

11 背乗り 2016年8月4日

朝。蝉が鳴いている。

月子の家で、市子と月子が朝食を食べている。

月子の箸が進まない。

市子「食べへんの？」

月子「……」

市子「食べてや。好きやろ？ブロッコリー」

月子「好き」

市子「いっぱい茹でてん。まだいっぱいあるし」

月子「うん」

市子「…食べてや」

月子「(食べる)」

市子は、食べる月子をじっと見つめて

月子「どうしよう？」

市子「え」

月子「戸籍取れへんかった」

市子「そうか」

月子「ごめんなさい」

市子「謝らんとって」

月子「うん」

月子、時計を気にして

月子「仕事いかな」

市子「うちな、」

月子「…うん」

市子「やっぱあかん…許されへんことしたんかもし

れんけど、うちがそんなに悪いんかな？」

月子「悪いとかちやうよ」

市子「月子には悪いと思っくんねん」

月子「お姉ちゃん、うちのこと守ってくれたやん」

市子「え？」

月子「行ってきます。洗いもんしとって」

市子「え」

月子、家を出て行くこうとするが、

松山「もしもし月子」

月子、立ち止まる。

月子「え？」

松山「うち、ありさ」

月子「なに？」

松山「今日、家行っいいい？」

月子「どうしたん？」

松山「こないだの北さんの話、気になって。市子さんのことも」

月子「でも」

松山「首は突っ込まへん。アカシのルールは守る」  
月子「わかった。待ってる」

市子「誰？」

月子「ありさ。アカシで出会った無戸籍やった子」

市子「言ったん？」

月子「相談した」

市子「なんで？」

月子「……」

市子「どこまで言ったん？」

月子「全部は言っへん」

松山「入ります」

ありさが、家に入ってくる。

松山「市子さん？」

市子「そうですけど」

松山「こんとき、市子さんはうちのこと、黙ってジ

ッと見てた。警戒してる猫みたいに、うちのこと

ジッと」

市子「何ですか？」

松山「北秀和」

市子「え？」

松山「会いました」

市子「……」

松山「市子さんのこと、殺そうとしてます」

市子「え？」

松山「うちは、月子のことが心配で来ました」

市子「え？」

松山「細かいことは知りません、でも、月子は市子

さんの問題に巻き込まれてます」

市子「月子そうなん？」

月子「え」

市子「北くんは、北くんがしたいようにしたらええ  
と思います。でも、うちも好きなようにさせて貰

うつもりです」

松山「市子さんの言葉はちょっと怖くて…やから、

うちは背乗りのことも市子さんに教えてあげて」

市子「へー」

松山「市子さんがどうするかは、うちは知らんし、

何にも言いません。やけど、月子は関係ないから

巻き込まんといたって欲しい」

市子「分かった。(月子に)でも、もう少しだけこ

こにいさせてくれる？」

月子「…ええよ」

松山「じゃあ月子、それまでうちん家おいで？」

月子「ここにおる。大丈夫やから。ありがとう」

松山「でも」

月子「大丈夫やから。姉妹やから」

松山「でも」

月子「もう関わらんとって。相談してごめん」

松山「え…」

市子「ほな、帰って下さい」

月子「ありがとう」

松山「うちが知ってるのは、ここまでです。それから、月子とも、アカシの人達とも、関わらんよ  
うにしたから」

空間がアカシに戻る。

松山「すいません。余計に混乱させてしまいました  
よね」

沈黙。

台風が近付いて来ている。

12 家族 2018年9月2日

後藤「(井出に)あの…、百子さんかもって？」

井出「え？」

後藤「さっき」

井出「…ああ」

後藤「その身元不明の遺体が、百子さんだと？」

井出「いえ、なんとなくです」

後藤「なんとなく？」

井出「はい、なんとなく」

後藤「……」

葛城「陽子、何か隠してない？」

井出「え？」

葛城「今日、変だよ？」

井出「そうかな？」

重松「変です」

井出「…雪ちゃん」

重松「何隠してるの？」

井出「…うん」

高木「私達には、言いにくいことですか？」

井出「いえ…」

葛城「話して？」

井出「……」

葛城「アカシのルール？」

井出「……」

葛城「ルールを越えるから言えない？」

高木「ルール？」

松山「アカシは相談者が戸籍を取得することを目的  
とする。それ以外のことで深く関わらないこと。

特に相談者が戸籍を取得するまでは、相手が望ま  
ない限り介入してはいけない」

高木「へー」

後藤「どうしてそんなルールが？」

葛城「信頼関係を築くため。戸籍問題は、本人が話  
したくない、隠したい過去も開示していきなきや  
いけない作業なの。だから、本人が頑張る意志が  
出来るまではこちらは見守ることが大切」

井出「知らなくてもいいことは、知らない方がいい。

その方がきつと傷つけなくて済む」

後藤「だから言えない？」

葛城「陽子、あのね、陽子の考えは分かるけど、み  
んなずっと社会から離れて生きてきたんだから、  
社会に順応することがどれだけ大変か分かるでし  
よ？状況によっては、ちゃんとこっちから手を差  
し伸べてあげなきや」

井出「だけど、それを急いだから月子ちゃんは、頓  
挫しちゃったんじゃない？」

後藤「そうなんですか？」

井出「気持ちの面ではそうだったんじゃないかな」  
後藤「詳しく聞かせて頂けませんか？」

葛城「…あの子は就籍手続きが必要だったから、月  
子ちゃんの子供時代を知っている人や証拠を探し  
に、生まれ育った大阪に私と2人で行ったんです」  
後藤「…それで？」

葛城「何も分からない。思い出せないって言うから。  
私がそれじゃ戸籍取れないからってちよつと詰め  
寄っちゃって」

重松「葛城さんそういうところある」

葛城「ちよつと」

後藤「それで頓挫？」

葛城「戸籍取る事諦めるって言われて、説得したん  
ですけど」

後藤「駄目だったんですね…」

葛城「まあ…」

後藤「どんな様子だったんですか？」

葛城「…哀しそうだったけど、家族ってどういうも  
のか？ってそんなことばかり聞かれて」

高木「家族」

葛城「初めは、思い出す為に聞いているのかなって思  
ったんですけど…娘さんが産まれた時どんな気持  
ちだった？とか、どんな風に甘えてきますか？と  
か、どういう時に抱きしめてあげるんですか？と  
か、そんなことばかり…」

高木「お子さんがいらつしやるんですね」

葛城「あはい、元々、私の娘が300日問題で無戸  
籍児になっちゃって…それを弁護士だった陽子に  
相談して…必死で戸籍を取って…それから、2人  
でアカシを立ち上げたんです…」

高木「そうだったんですね…」

後藤「それで、月子さんはそのまま居なくなつた？」

葛城「次の日ホテルから居なくなつて…置き手紙  
だけ…ありがとうございます」

後藤「それからアカシには？」

葛城「一度も…」

後藤「でもさっきの話も踏まえたら、頓挫の理由は  
違いますよね」

葛城「架空の人物として申請することの限界を感じ  
ていたんだと思います」

高木「(井出に) 教えてくれませんか？」

井出「え？」

高木「無戸籍のこと、しつかりと知らないまま取材  
依頼しちゃってすみませんでした。月子さんのこ  
とも、月子さんのことも、もつと知って貰わない  
と…もちろん、記事にしちゃいけないことは、記  
事にしませんから。ただ、知りたいんです」

重松「嘘でしょ？」

高木「え？」

重松「面白いからでしょ？」

高木「違う」

重松「珍しい話が面白いから。可哀想だと思いた  
いから。同情したいから。だから」

高木「違います！」

重松「…大きい声出さないでよ」

高木「ごめんなさい…でも私、月子さんの気持ち  
分かるって言ったら大袈裟ですけど…分かるん  
です」

重松「何が？」

高木「私も小さい時から父子家庭だったから。母親  
って知らなくて…家族ってどういうもんか知らな  
くて」

重松「あんたのそれとは全然違うの」

高木「それはそうかもしれないけど」

重松「だったらやめて分かったような言い方」

高木「…駄目ですか？知りたいと思つたら」

重松「記事にしたいからでしょ？」

高木「じゃあ、記事にしませんから」

後藤「曜さん？」

高木「私、今プロポーズされてて」

後藤「えー？」

高木「この人から。結婚前提にお付き合いしてて」

後藤「え、今言うそれ？」

重松「えなに？」

松山「そうなんや」

高木「だけど、結婚出来る自信が無いんです」

後藤「そうなの？」

高木「そうだよ」

後藤「えええ」

高木「裕也だけが悪いんじゃないの」

後藤「何が駄目なんですか？」

高木「だから、家族とか母親とか私分らないから」

後藤「それ理由になつてないですよ」

高木「ほらそういうとこ」

後藤「ほらつてどこ？」

高木「うるさい」

後藤「えー」

高木「人の気持ちを考えるのが下手くそな人と私は

一緒になれるかわかんないの」

後藤「僕そんなに下手ですか？」

高木「下手だよ」

後藤「…そうなんだ」

高木「……」

改めて井出に、

高木「記事にしない方がいいなら、しませんから」

井出「…うん、でもね…私も知ってること、ありさ

とそんなに変わらないかな」

松山「え？」

井出「月子ちゃんから、会いたいわって電話貰つてね、

正枝が大阪から一人で戻ってきた後すぐかな」

葛城「電話？」

井出「うん。それで、大阪に会いに行ったの。そし

たら、北くんも一緒にいて」

葛城「どうして言つてくれなかったの？」

井出「ごめんね」

高木「それで何が？」

井出「ありさと同じこと。市子さんが、小泉つて、

月子ちゃんの育ての親を殺したつてこと。その前

科がバレるかもしれないからつて、市子さんが月

子ちゃんに戸籍を変わりに取得して来てくれない

かつて…それで、私がアカシに来たんだつて。嘘

付いてごめんさいつて」

高木「月子さん…」

井出「2人が、市子さん本人が戸籍取得の手続きを

するつてなれば、アカシは協力してくれますか？

つて聞いてきたの」

葛城「それでなんて答えたの？」

井出「もちろん、戸籍取得のお手伝いはするつて」

重松「そうなんだ」

井出「でも、罪は罪だから、それは償わないといけ

ないと思うつて。そうじゃないと、戸籍を取得出

来たとしても、市子さんは新しい出発をやつぱり

出来ないんじゃないかつて」

高木「…そしたら？」

井出「2人とも黙つてしまつて」

高木「……」

井出「月子ちゃんも、北くんも、その市子さんの罪

に関わつたなら、2人もちゃんと償わないといけ

ないつて言つたの」

高木「……」

井出「月子ちゃん、分かりましたつて。だけど、お

母さんと会つてから考えたいですつて」

高木「…お母さんには会えたんでしようか？」

井出「どうだろう…」

後藤「僕が川辺なつみに会つた時の様子だと、会え

てないと思います」

高木「もしそうだとしたら」

後藤「もう死んでしまったから、二度と会う事は出

来ない」

高木「そんな…」

松山「月子はまだ生きてるんですか？」

後藤「おそらく、生きていると思いますけど…その

身元不明者が、市子さんなら…」

井出「月子ちゃんは生きてますよ」

後藤「？」

井出「あのね、今日18時につて話」

松山「はい」

重松「それ結局何なの？」

井出「先週、月子ちゃんから電話があつたの私に」

高木「え？」

井出「お待たせしました。ようやく井出さんに会い

に行くことが出来ますつて」

葛城「そうなの？」

井出「その時に、月子ちゃんが、正枝と、雪ちゃん

と、ありさも呼んで欲しいつて」

重松「え」

松山「うちらもっ？」

井出「うん。でも黙つてて欲しいつて。だから言え

なかった。私も、どうして？って聞いたの。だけ  
ど…会ったら話しますって」

松山「そうなんや…」

井出「百子ちゃんは呼ばなくていいの？って聞いた  
ら…ちよっと黙っちゃって、百子は大丈夫ですっ  
っ」

葛城「どうして？」

井出「それ以上は聞けなかった。会えばきつと教え  
て貰えると思って」

後藤「それで僕達の取材も今日に？」

井出「はい…亡くなった市子さんのためにも、どう  
なるか分からなかったけど、立ち会って貰うかは  
貴方達2人に会ってから決めようと思ってたんだ  
けど」

高木「ちよっと待って、今何時？」

後藤「(時計を探して)」

高木「あと10分…」

井出「うん」

高木「18時まで後10分だ」

携帯の着信音になる。

13 川辺市子の最期 2016年 9月2日

気づくと、雨が激しくなっている

雷が鳴る。

携帯の着信音はまだ鳴り響いている。

そこに、北秀和が現れる。

北「もしもし」

雨が激しくて、声が届かない。

北「もしもしーしー」

市子「もしもし、北くん」

北「川辺か？」

市子「うん。約束通り、今日決行するから」

北「ほんまにするんやな？ええねんな？」

市子「決めたから」

北「川辺がええんやったらそれでええねん」  
市子「ありがとうやで」

携帯が再び鳴っている。

時間が通り、言葉が入り交じる。

百子「もしもし」

月子「もしもし、モモちゃん」

百子「市子ちゃん」

月子「ごめん、違うねん」

百子「え？」

月子「嘘ついとってごめん」

百子「なに？」

月子「うちな、月子って言うねん」

北「警察行かへんのか？」

市子「戸籍をな」

北「一緒に行つたるから」

市子「なりすます方法があるんやって」

北「罰受けなあかんで」

市子「身寄りがなくてな」

月子「月子って言うねん」

百子「知ってる」

月子「え？」

百子「だって、免許証持ってるでしょ？」

月子「持ってる」

百子「買い物一緒にしたとき見えたから」

月子「市子ってうちのお姉ちゃんやねん」

市子「うち、何が悪かったんやろ？どこで間違えた  
んか分からんねん。あの人殺したんも、自分を守  
るためやったし、うちが嘘ばっかついてきたんも、  
うちが無戸籍やからやけど、うち分からんねん」

北「何も悪ないんかもしれへんな」

市子「だからな、警察行こうにも反省できひんねん。

それやったら、犯罪って分かかってしてな、捕ま

ったらええかなって思うねん」

北「バレて欲しいんか？」

市子「もし上手くいったら、そのまま生きていける

かもしれないし」

北「川辺、悪魔やで」

市子「また言われた」

北「ほんまやわ」

市子「ははは」

北「ははは」

市子「月子、北くんがな、車出してくれるから」

北「アルトやけどな」

月子「アルトかー」

北「ええやんけアルト」

月子「なんでモモちゃんも呼ぶん？」

市子「妹の友達と仲良くなりたいやろ？」

月子「やけど今は」

北「ええやん、たまには全部忘れたって」

月子「モモちゃん、温泉旅行いかへん？」

百子「えー楽しそう」

市子「戸籍とれたばっかの人やったら」

北「なりすましてもバレへんのちゃうかって？」

市子「そう思うねん」

北「アホか」

市子「アホやから」

月子「いく？」

百子「いくいく」

月子「お姉ちゃんもおるけど」

百子「いくいく」

月子「変な男の人も一緒やけど」

百子「えー」

北「おい！」

百子「改めまして」

月子「改めまして」

北「月子ちゃん」

市子「モモちゃん」

百子「はじめまして」

月子「はじめまして」

市子「はじめまして」

北「はじめまして」

雷が鳴る。

北「この夏は、台風がやたらと来る夏で」

月子「旅行当日は台風が上陸する日やって」

月子「天気悪いのに行くん？」

市子「行くで」

月子「他の日にしたら？」

市子「もう予約してもうてる」

月子「なあ、どこに行くん？」

市子「館山の温泉や」

月子「どこそれ？」

市子「千葉県」

月子「有名なん？」

市子「そんな有名なちゃうけどな」

月子「ほななんぞ？」

北「閑散とした館山の民宿に着いて、民宿は老夫婦が切り盛りしてる小さいとこで」

月子「晩ご飯食べて、ほんで温泉に女三人で入った

なあ」

百子「裸の付き合いやーって言う市子さんを見てる、北さんはちょっと寂しそうで」

月子「お風呂上がって来たら、北くんが、晩酌の用意してくれてて」

北「瓶ビール、グラスに4つ分けて乾杯しようとしたら月子が、」

月子「うち今日飲むのやめとく」

市子「って言い出して」

市子「なんでなん？」

月子「ちよっと体調悪いから、生理近いだけやと思う」

市子「とか、話したら」

月子「モモちゃんが気づいたら寝とって、姉ちゃん

が急にグラスに水ドバドバいれて」

市子「イブあるし、飲み」

月子「って無理矢理うちに水飲ませようとしてきたから、うち」

月子「何か変やで？」

月子「って言って、ほしたら、北くんが」

北「百子を海に流すんや」

月子「って言い出して、うち、そんなん知らんし」

月子「え、何でモモちゃんなん？」

月子「え、なんで？」

市子「月子ごめんな、うちな、頭おかしくなってもうたんかもしれん。元々かもしれんけどな」

月子「うち、悪いこと、自分の意志でしやんと警察にいけへんからな」

月子「とか、よーわからんこと言うてきて」

市子「やからな、百子ちゃんをな、背乗りさせて貰

うわ」

月子「えー」

月子「絶対あかん」

月子「え、そのための旅行やったん？」

北「そうや」

月子「って北くんが言うから」

月子「北くんも本気なんって聞いたら」

北「俺は川辺の味方やから」

月子「とか言うから」

月子「うち、絶対許せへんってなって」

月子「警察呼ぶ」

月子「って言ったたら、お姉ちゃんが、うちに飛びついてきたから」

月子「うち、お姉ちゃん突き飛ばして」

市子「月子、頼むわ。これで最後にするから。な？

これでほんまにもう、月子の前からも居なくなるから。な？月子は巻き込みたくなかったから、やから、睡眠薬で月子は寝てもらおう思ってたんやで？」

月子「うち、哀しくて、哀しくて、一緒に、姉妹で、

お母さんも見つけて、親子で、家族で、一緒に暮らそうなって、お姉ちゃんの言ってくれた言葉が、

嘘やったんやなーって思って、哀しくて、哀しくて、仕方なくて、ビール瓶、手に取って、お姉ちゃんの頭砕いてた」

市子が倒れ、北が発狂する。

月子「それから、北くんが、全部処理してくれて」

北「ちょうど、台風凄いから、誰も声聴こえてへんから。月子はしてへんからな、川辺はこれで良かったん。殺さなあかんかったん。俺が殺したらなあかんかったん。絶対、そうやってん。だから、俺が殺したことにしたってくれ。してくれ。頼むわ」

月子「うちは、何も言えへんかった」

月子「んで、北くんは、お姉ちゃんを背負って、自分の車に乗って、それでおらんようになった」

月子「モモちゃんは、何にも無かったみたいな、楽しそうな顔で寝とって、うちは、その寝顔を見ながら、いつか話した、歌詞を、書いてみようって思って、夜が明けるまで、書いた。書いたけど、書ききれへんかった」

月子「そんで、朝が来て、うちはモモちゃんと2人で、タクシーを呼んだ」

雀が鳴いている。

百子「おはよう」

月子「おはよう」

百子「月子ちゃん」

月子「モモちゃん」

百子「友達」

月子「…友達」

百子「うん」

月子「はは」

百子「これからも」



月子「これからも…」

百子「私達、もう戸籍あるし、沢山思い出」

月子「思い出…」

百子「つくろう」

月子「うち…」

百子「言わんでいい」

月子「お姉ちゃん、殺した」

携帯が鳴る。

百子「もしもし、井出さん？私、百子です。あのね

…あの、市子ちゃんは、市子ちゃんじゃなくなって、

…その、わかんないんだけど、私、どうしたらいいんだろう…」

井出「ごめん、ちよつと待って」

14 ごめん、待って 2018年頃

それぞれの記憶が揺れ動く。

月子「ねえ、本当は私にも話してないことがあるんじゃない？」

井出「ごめん、待って」

月子「私に話すのも怖い？前にね、あなたと同じ名前の人と会ったことがあるの。川辺市子。その人は、何者なの？」

井出「ごめん、待って」

月子「百子ちゃんと会ってるの？ありさとも会ってるでしょ？2人とも、詳しいこと話してくれないけど、あなたのこと凄く心配してるのが分かるの。本当のこと、話してくれない？力になれると思うから」

井出「ごめん、待って」

月子「ねえ、少しでもいいから思い出して？大阪のどこに住んできたの？何でもいいの。何ていう駅だった？駅前には何があった？覚えてるお店とか、風景とか、何でもいいから」

葛城「ごめん、待って」

月子「…葛城さん、どうして私は信じてもらえないの？家族って何ですか？子供を産むってどういう感じですか？」

葛城「ごめん、待って」

月子「へー可愛いですか？子供。私のお母さんは嬉しくなかったのかな？私が産まれたこと。可愛くなかったのかな？私のこと。家族、私も持つことできるのかな？」

葛城「ごめん、待って」

月子「いつか普通の家族みたいに、私も、ちゃんと子供のこと愛せるのかな？」

松山「どうしたん？」

月子「あのね」

松山「なに？」

月子「本当はね」

松山「会って欲しい人？」

月子「私は」

松山「うちにだけ？」

月子「私は」

松山「いいけど、誰？」

月子「誰かに」

松山「市子ちゃんのこと探してた人？」

月子「気づいて欲しくて」

松山「変な人やったけど、やっぱり知り合いなん？」

月子「雪ちゃん」

重松「…」

月子「雪ちゃん？」

重松「あ、うん」

月子「私は市子」

重松「ごめん、本当の名前は？」

月子「どこにでもいる普通の人になりますようにって、嘘かもしれないけど」

重松「ごめん、待って」

月子「タイムマシンがあるなら産まれた日に行ってみよう」

重松「行ってどうするの？」

月子「私を捨てた母親を一目見たい」

重松「見てどうするの？」

月子「分らないけど」

重松「好きなんだ、やっぱりお母さん」

月子「全然。記憶ないから」

重松「なんかね、本当の母親を求めるのって本能なんだって」

月子「へー」

重松「私もタイムマシンがあったら」

月子「うん」

重松「でも、もし、とか無いから」

月子「なにそれ」

重松「どういう気持ちなのかなーって」

月子「え？」

重松「月子ちゃん、お母さんに」

月子「憎いよそりゃ」

井出「月子ちゃん」

月子「井出さんと2人つきりやった大阪からの新幹

線。あの時黙って買ってくれた、新大阪駅のにぎ

わい弁当。美味しかったなあ」

井出「あのね」

月子「葛城さんと2人で大阪に行ったときも、品川

駅で、深川めし買ってくれて、あれも凄く美味し

かったなあ」

葛城「月子ちゃん」

月子「うちはきつと本当のこと言えへんから。やつ

ぱりあかんことはあかんから」

葛城「お願い、待って」

月子「私が産まれたときの気持ちとか、どんな風に

笑ったのかとか、どんな風に抱きついてきたのか

とか、わがまま言ったのかとか、聞かせて欲しい」

なつみ「月子」

月子「うちはお母さんを許さへん」

なつみ「ごめんやで」

月子「うちはお母さんを許さへん」

なつみ「ごめんやで」

月子「うちはお母さんを許さへん…」

なつみ「うん」

月子「なんで、うちを捨てたん？」

なつみ「捨ててへんから」

月子「なんでうちは小泉なん？なんでうちにはツキ

コがおんの？月子はうちやないん？うちのこと産

んだとき、どんな気持ちやった？お姉ちゃんは、

何で無戸籍なん？なんでうちが、あの病気のツキ

コのこともお姉ちゃんのことも背負わなあかんか

ったん？うちのこと好きやなかったん？」

なつみ「好きに決まってるやろ」

月子「うちは誰？」

なつみ「月子や。うちの大事な娘や」

月子「小泉月子やろ。あの気色悪いお父さんの。血

も繋がってへんのに」

クマゼミが鳴き始める。

月子「タイムマシンがあったらなあ」

月子「ドラえもんがおったらなあ」

月子「あの日ってどの日？」

月子「お父さん殺した日？ツキコの呼吸器外した

日？」

月子「それはもう手遅れやし」

月子「あの日のこと、うち小さかったから、なんと

なくしか覚えてへんけど」

15 運命の日 1996年6月27

市子、月子、なつみ、小泉が、

食卓を囲っている。

なつみ「月子、あんな、お別れせなあかんねん」

月子「……」

なつみ「月子のお父さんは、この小泉さんやねん」

月子「……」

なつみ「今日から月子は、お父さんと一緒に暮らす

ねん」

市子「……」

月子「…え」

小泉「月子」

月子「……」

小泉「やっと迎えに来たで」

月子「…え」

小泉「やっと迎えに来たで」

月子「…お母さん？」

なつみ「あんな…月子、お母さんな、お母さんな」

月子「？」

なつみ「月子のな、ほんまのお母さんちゃうねん」

月子「…えー？」

なつみ「お母さんやと思ってくれて、ありがとうな」

月子、市子のところに行く。

なつみが近寄って、

なつみ「お姉ちゃんとも、お別れやねん」

月子、市子の手を離さない。

なつみ「お姉ちゃんも、ほんまのお姉ちゃんちゃう

からな、バイバイせなあかんねん」

月子「…え？えー？」

なつみ「月子は、ええ子やな」

市子「……」

なつみ「今日から、ほんまのお父さんが来てくれた  
からな、もつと安心出来る。もつと幸せになれる  
からな」

月子「……」

小泉「月子。お父さんとこれから、いっぱい」

市子「タイムマシンがあったらなあ」

月子「ドラえもんがおったらなあ」

小泉「お父さんとこれから、いっぱい」

なつみ「月子はええ子やなあ」

市子「タイムマシンがあったらなあ」

月子「ドラえもんがおったらなあ」

小泉「いっぱいええことあるからな」

なつみ「月子」

なつみが、月子の手を小泉に繋げる。

なつみ「小泉さん、月子をよろしくお願いします」

小泉「はい。分かっています」

市子「月子」

月子「お姉ちゃん」

市子「頑張るんやで」

月子「頑張るんやで」

小泉「行こうか」

月子「ばいばい」

小泉、月子を連れて出て行く。

なつみ「市子」

市子「なに？」

なつみ「頑張るで」

市子「え」

なつみ「市子も頑張つてや」

市子「あうん」

なつみ「お母さんも頑張るから」

ゆっくり暗転。

16 18時を越えて 2018年9月2日

雨が激しくなっている。

が、観客には聴こえない。

ステージには高木と後藤だけがいる。

後藤は眠っているようだ。

井出がちゃぶ台を持って入ってくる。

高木「あ」

高木が、それを見て運ぶのを手伝う。

井出「ありがとう」

高木「いえ」

井出「（後藤を見て）ずいぶん疲れてるのね」

高木「最近忙しかったみたいで」

井出「お仕事大変なんですね」  
高木「そんな」

井出、時計を見て、

井出「もう遅いし、部屋はあるから、2人とも泊ま  
っていったら？」

高木「でも悪いです」

井出「台風、凄いことになってきてるし」

高木「でも」

井出「今、正枝がご飯作ってるから、2人の分も」

高木「…いいんですか？」

井出「もちろん」

高木「すみません…」

井出「いいえ」

高木「（後藤を起こそうと）ちょっと」

後藤は起きない。

井出「起きないねえ」

高木「すいません、寝起き悪くて」

井出「…どうするの？」

高木「叩き起こしてますいつも」

井出「（笑って）なんかいいじゃない」

高木「よくないですよ？」

井出「結婚」

高木「え？」

井出「いいんじゃない？」

高木「…そうですかね？」

井出「うん、そう思う」

高木「井出さんは、ご結婚されてるんですか？」

井出「ううん、してない」

高木「えーしてると思ってました」

井出「そう？」

高木「だって、こんなに沢山の人を支援してて」

井出「それ関係ある？」

高木「ありますよ。本当の意味で人の為に動いてい  
らっしゃる」

井出「…ありがとうございます」

高木「どうしてですか？」

井出「え？」

高木「あ、結婚してないの」

井出「ああ」

高木「ごめんなさい…不躰でしたね」

井出「私もね、結婚したかった人がいたんだけどね」

高木「…はい」

井出「でも、出来なかった」

高木「…どうしてですか？」

井出「私ね、子供が産めないから」

高木「え…」

井出「子宮、無いの」

高木「あ…」

井出「その人は子供が大好きで、凄く子供を欲しが  
っていたから」

高木「…」

井出「だから、別々の人生を選んだ」

高木「…あの」

井出「謝らなくていいから」

高木「え」

井出「謝ろうとしたでしょー？」

高木「あはい」

井出「もう乗り越えましたので」

高木「…凄いです」

井出「アカシを初めてからね、色んな家族の形を見  
て来た」

高木「家族」

井出「何が普通か何て分からないけど、やっぱり子  
供が笑ってないのは、良くないなって思うから」

高木「…」

井出「女としてはさ、この人の子供を産みたいーと  
か、毎日ドキドキするような人と一緒にいたいー  
とか、思うかもしれないけどね、結婚って、家族  
になっっていくことだと思うから」

高木「家族になる…」

井出「うん。だから、女としてだけじゃなく、母親  
として」

高木「母親…」

井出「この人との間に産まれた子供が、笑ってるっ  
て思える？」

高木「まあそれは思えます」

井出「だったら、大丈夫じゃないかな？それにあなたのことすつごく好きそうだし、この人」

高木「ははは、それはありますけど」

井出「いいもんだよ家族は。きつと。それをね、私は信じてるから。この仕事をしてる」

高木「あ、それ、アカシの記事に書いてもいいですか？」

井出「あ、そっか。その取材だったね」

高木「はい、もつと聞いていいですか？」

井出「いいよ」

葛城、松山、重松が、和食をそれぞれ運んでくる。

葛城「出来たよー」

松山「ねえ、井出さん、雪ちゃん料理出来る様になつたんやね」

重松「失礼な、前から出来るし」

井出「ありがとう」

高木が手伝っている。

食事は、井出と重松、松山、高木と後藤の5人分だ。

食卓が並び、それぞれが食事の準備をしている。

高木が後藤を起こす。  
しぶしぶ起きる後藤。

重松「この人寝てたから食事抜きだね」

葛城「意地悪言わないの」

後藤「あれ？今何時ですか？」

高木「うるさい、ご飯作って頂いたんだから御礼言つて」

後藤「ああ良い匂い」

松山「こっち座って下さい」

葛城だけが座らない。

井出「あれ？正枝？」

葛城「私は大丈夫。もう帰らなきゃ」

高木「でも外凄い風ですよ？」

葛城「家近いから。それにタクシー呼んだし」

井出「まあ、まだ子供小さいもんね」

葛城「そう」

重松「ありさ、お茶は？」

松山「えー」

重松「取ってきてよ」

松山「なんでうちが？」

重松「一番近いでしょ」

松山「一応客人なんですけど？」

重松「うるさいなあ」

松山「ほんま変わってへんなあそういうとこ」

しぶしぶ松山はお茶を取りに奥に消える。

重松「先に食べていい？」

井出「駄目。揃って頂きますしてから」

重松「えー」

後藤「わがままですね」

重松「なに？ただ飯喰いのくせに」

高木「払います」

井出「ああ、もういいから」

葛城「雪ちゃん」

重松「冗談でしょ」

インターホンが鳴る。

葛城「あ、タクシーかな。はいー！」

松山がお茶を持って戻って来ている。

葛城が帰るのを見送ろうと、

葛城「じゃあ、帰ります。お二人ともごゆっくりしてください」

高木「すみません」

葛城「写真はあんまり撮らないくださいね」

後藤「分かっています」

高木「ちゃんと見てますから」

葛城「(井出に) それじゃ、また明日来るから」

井出「うん」

葛城「ありさは泊まるのでいいのね？」

松山「うん、明日休みなんで」

葛城「お、しっかり働いてるねー」

葛城が出て行くのを、井出、松山、高木、後藤が見送りに出て行くようとして、

葛城「いいって」

井出「玄関まで、ほら雪ちゃんも」

重松「えー」

重松も、しぶしぶ見送りに出て行く。

食卓だけが残っている。

百子「蟬…」

すると、いつかのなつみが、エプロンをして、現れる。

なつみ「市子ー、月子ー、ご飯ー」

隣りの部屋から、姉妹が笑い合う声が聴こえている。

なつみ「こらー、2人ともー、ご飯ー」

市子・月子「はいー」

小泉が現れる。

## 17 ？年 いつかの食卓

雨が上がったようだ。

入り口から、ギターを持った百子が入ってくる。

辺りを見渡すけど、そこには誰もいない。

百子は端っこの椅子に座り、ギターのチューニングを始める。

百子が、何やら歌詞を広げる。

それを見ながら、初めて歌うように、その曲を歌い始める。

小泉「お、美味そう」

なつみ「正雄くん、座っとって」

相変わらず、隣りの部屋から姉妹の笑い合う声が聴こえる。

なつみが「こらー」と言いながら隣りの部屋に行く。

小泉が、先に味噌汁をすする。

小泉「うまい」

『わたしたち、このせかいで』

ふたりぼっち

ひみつでつながれた

わたしたち、いきをひそめ

うそを、のみこんだ』

百子が、歌う。

市子と月子に向けて。

『わたしたち、このせかいで』

ふたりぼっち

ひみつでつながれた

わたしたち、いきをひそめ

うそを、のみこんだ

ゆめなんて、みせないで

ゆめなんて、みたくない

ゆめなんて、みせないで

ゆめなんて、みたくない』

クマゼミが鳴いている。

互いに互いを感じ合っているように。

ふらりと月子は居なくなる。

なつみに叱られながら、食卓に現れる、  
市子と月子。

終わり

ありふれた、穏やかな食卓の風景。

市子、月子、なつみ、小泉

そして、もう一人、難病のツキコも  
そこにいる。

気づくと、周りの椅子に、

井出、葛城、重松、松山、後藤、高木が、  
食事をする家族の姿を見つめている。

突然、大きな雷が落ちる。  
停電。

劇場が真っ暗になる。

静まり返る劇場。

劇場の壁に、

「ごめん、ちょっと待って」

の文字が浮かび上がる。

そして、どこからか、月子の声が聴こえる。  
真っ暗な闇の中に。

月子「うん。待たない。待つことが出来ないんじ  
やなくて、待つ必要がないから。過ぎ去ったこと  
は還ってこない。どれだけ、過去を想い悔いても、  
今を変える事はできないことを、私は知っている。  
あの食卓も、あの暑い夏も、あのアイスクリーム  
も、お母さんも、お父さんも、お姉ちゃんも、全  
てはもう終わったことだから。私が私である為に、  
私は私がしてしまったことを。受け止める。そし  
て、いつか、やっぱり、夢を魅たい。と、思っ  
てる」